英國史畧

四

伊9
369
4止

東京專門學校圖書
野9 門 369 卷 4

英國史略卷之四

作樂戸痴鬻　譯述

查爾斯第二の事

評に云査爾斯第二を天性才に富み其其用方を謬まり故に曾て愚かなる語を吐かざりき又曾て賢き事も亦はゞ多くあり

前巻に掲けし如く格朗宛國の大權を握りし間査爾斯第二を佛國に寓居しるが其弟惹米士

と共に正教に改宗したり之ぞ英國の爲に一大不幸と謂ふべし

偖も王を艱難の中に流離して備に辛苦を歴たましう共一旦位に昇るに及びて氣緩と志動き行狀猥褻驕奢を極め後宮の侍女常に柳腰梅姿を集へ俳優歌妓を聚め内寵夥多あり之れぞ後年に至り庶孽多くありて其却て皇后葡萄王の女加佗隣に子もあらざりき

王を西暦一千六百六十年五月廿九日我西後三年明順治元年此年明亡倫敦に歸りて位に即るが未だ

都に入らぬる前に一切前罪を赦ぬ其共即位の後改めて令を下し父王を弑せる謀に與せる者を自出すべく十四日内を限り來歸せば其人を誅すべしとありるに恐きて出奔し捕えらるる者も有るが頓て捜索して十有餘人を誅し之を處するに極刑を以てし遂に格朗究の墓を掘ち尸を野に捨て首を梟しうに諺に云仇を復するも死に及かざると是何ぞ暴ならや

王欲を縱にし度を敗るるぞ國賦次第に用に

足らざ依て佛朗西（フランス）に在る所の屬地を佛王路易（ルイ）に
第十四に賣るに國人地を失ふを以て辱とし
愈悅ひざ于時荷蘭（ホルランド）の商賈海内に偏く貨物充牣
して幾（シン）と英國と埒しらざれど英人之（レ）を嫉を將に
之と戰んとす王の弟約克（ヨルク）公侈然として其事を
扶けざれど王も之に從ひ西曆一千六百六十五
年我靈元天皇寛文五年清聖祖康熙四年英初めて交戰するが六月に
至りて大戰し大に荷師（ヨツプタン）を敗りて英船十九艘を
喪いしめ其大將屋伯丹（ヨツプタン）の坐船も破裂し空中に
飛失せ英人（ヒツリス）大勝利を得たりける

然るに天災忽ち起り大疫倫敦（ロンドン）に行いる是を國
疾疫に遭ふの始まれど此度疫氣轉た盛に
行ひ郊外より城中に及ぶせしが折節六月の
炎天にて病者の苦も更に甚しく死者道路に
相望む始めを少き者を壯年の者より多く女を
男より多く病るが後を貧富少壯男女を論せ
ず悉く大厄に罹り七八月の間暑氣猶退（ホ）らざ死
者更に多く其先一七日毎に二百七十人より漸
次に增加し後の七日間に五千五百六十八人
或は七千四百九十六人に及び街衢行者絶え商

旅行うゞ人く洶こたりくるゲ九月に至りて七日間死せる者八千二百五十人或ハ一夜三千人に及びぬ抑、當時の紀載詳を得ゞ誌を所の者を誠に三分の二に當りつべし此て十二月に至り疫氣全く消滅し鄉閭に避し者稍、都府に歸り人心僅に治まりくり此大厄に死せる者無量十萬餘人既にして街衢舊に復し人煙ともと隙地ホし人思へらく此病たる人の惡業に過るに起り自ら其生を戒へりと是より罪を悔ひ神を禱り善事を行ひ厚く貧困病痾に施せる者も多うりけ

り大厄の後復翌年の九月倫敦（ロンドン）に火災起りぬ此時街衢甚だ陝隘ありくる上、天旱して河水涸き屋材悉く木ありくれぞ道を夾りて延燒し風郭外より吹立て城中に入し程に其火三日三夜消滅せれ黑煙天を蔽ひ飛塵百餘里の地に達し街衢四百坊屋一萬三千をぞ延燒しけりくるゞ人を傷ふをを至て少し偖此蕭條たる瓦場再び變して隙地ホく高堂大廈立並び實に都城一新したりくり

荷蘭（オルランド）との戦争屢〻ありしが英人（イギリス）常に勝利を得荷境（オルランド）を侵掠せしなど荷人を專ら仇と復して海上に志を得んことを欲しる然るに英人（イギリス）毎に勝利を得るとつへども國家多難にして王又奢侈ありしなど暫く節省して國力を舒んとを謀り既に休息を議る時に荷人（オルランド）大に師を興して英境に迫り備なきに乘じ所〻を侵掠しかりけるなど英人俄に師船を放てこを救ふ程に荷人遂に退きぬ此年即ち西曆一千六百六十七年八月我靈元天皇寛文七年清聖祖康熙六年荷蘭と和しかるが國人を

大に之を恥とせり王流離の間羅馬（ローマ）正教に入りなれど亦國に此教を興復せんとて國人を是より前女王馬利（マリー）の為に困しめきしを心に深く記しなれど常に之を爭ひ且王正子なりしかばなど位約克（ヨルク）公に傳りるを是も亦正教に入り王より一層凝固にて在りるなどいひたもして世嗣の列を廢せんとするに王を之と艱難辛苦を共にせし同袍亦上尚亦已と同宗同志あるになど必ずこを世嗣にせんとて斷えなど爭論をなしたりかる

抑顯理第八の代ヨ羅馬教即ち正教ふりを廢してプロテスタント宗即ち西教ふりを興せしより以來國人專ら西教を尊むといへども代々この王或を彼を揚げ是を抑へ盛衰代謝して相容るゝを能はざる國其害を蒙ることを尠からず從て人命を傷ふこと多うしてを

王の代ヨ一個卓絶ある人英國ヨ顯はれ其名をイサーク。ニュウトンと以ひて算術。窮理學ヨ於て夥多の發明を為し天地間の真理を詳述したるしが實ヨ古今未曾有の人ヨぞありける

西曆一千六百七十七年我靈元天皇延寶五年清聖祖康熙十六年約克公惹米士の女を以て荷蘭の部長維廉ヨ嫁せしむ抑維廉を王佛國より倫敦ヨ入るの前日日耳曼ヨ生まれたりしるが此婚成て遂ヨ斯丟亞爾的の朝に至りぬ

王耽溺度ふく寶庫屢乏を告ぐれども敢て改めず年老て其性猶收らず婦人を挾み歌官をして淫詞を唱ゑしめ諸辟と讙宴賭博して更ヨ人理を顧みず死期の將ヨ至らんとするを知らずして痛飲せられしが忽ち病痾を引起し西曆一千六

百八十五年我年清聖祖康熙廿四年遂ニ殂落セ時ニ齡五十七位ニ在ル三十五年ニ有リ之リ去セども國民更ニ哀む者ふく葬ニ會セる人も寥〻として唯約克(ヨルク)公と羅馬(ロマ)教派の教師ばかり其喪を經營し多リ之を

惹米士(ゼームス)第二の事

評ニ云惹米士(ゼームス)第二を教門ニ惑溺して深く之ニ凝リ固ル之を其行狀尤も僧徒ニ適當セといへども王國を維持し蒼生を紓御セんべき大道を更ニ知ら

ざりき

偖も惹米士(ゼームス)王殂して位を嗣くべき正當の人ふうりゝれど遂ニ約克(ヨルク)公王位ニ登ル之て惹米士(ゼームス)第二と稱しそるが宰輔舊臣其位を改るをふく且大臣を召して國中の政教悉く舊章ニ隨ふべき由を命じ民ニ榜諭せられ之を人〻大ニ悅び逢へる然るニ幾程もふく民ニ賦を徵しそり抑此頃前王殂落せしを以て宜く徵賦を免ぜらるべき舊例ふれを之を聞く人民始て懼る心ありて加ふるニ數日の後王正教の教堂ニ詣で爰ニ

齋祀を行はるゝを國人愈疑ひ迷ひゝるが是より王を一向正教と思復すべき手段なきなぞ
日月を費しゝ
查爾斯第二は鍾愛の一庶子ありゝモンモウ
ツ公を封せられるが尚未だ少年ありゝるを
親隨の者共一日たりとも其主を以て王位に在
らしめむをと企望せしなぞ前代の間曾て今王
と王位相續の列より省くべき由布告せしを有
るを以て爰に專ら其說を主張し幼主を說き
勸めし程に王即位の後四五箇月を經てモンモ

ツツ公を親隨數騎を以て旗を西方に起せしに
其近鄰に住る西教派の人々之に荷担し頻てセ
ジモールに於て王の兵と戰ひるに果敢なく
打負て幼君俘虜となり遂に首を失はれたり
王西教派の人を惡むを深ゝれぞ其餘黨穿鑿に
事よせ殘刑を用ひらるゝが就中哀れなるを
コヲントと呼べる女子なりゝ此女を人に知
られたる慈悲者なりゝれぞセジモールの戰場
を落延し敗卒此女の家に迯入りて只管匿まん
をと乞求をゝるなぞコヲントも憫まる思ひく

遂に匿ひたり
于時餘類の穿鑿厳しく若し叛黨と告る者并に
之を匿ふ人と訴ふる者には莫大の褒賞ありべ
き旨國中に布告ありしかるに然るにコヲントの恵
みに匿いきたる敗卒此由を聞知りて自ら廳に
訴へ出てコヲントト王命に戻り其身を匿ひし旨
白状に及びしかれども敗卒を恵に叛き恩人を訴し
と云へども其身の罪を赦ゆるしコヲントを人を救
ひし慈悲に依て遂に其身を刑場に曝しける
王の威權益張り教門の惑愈熾んに成行て遂に

是迄の定律を破り宰相輔臣を始め朝廷貴官の
輩を悉く羅馬（ローマ）正教の人たるべく西教派の者權
職に在るべからざる旨を令しける
浩々たれども西教派の者を痛く寃抑せられ民
心淘々たりしかれども王の長女馬利（マリー）を父に違ひ
最も西教信仰ありける上王位の嫡嗣たりしか
ども王既に中年を過しを以て殂落の後を速に王
の非政を改め國を舊の有様に復せんと夫と
ひそ樂を待たりける西暦一千六百八十八年
六月（我清聖祖康熙二十七年）東山天皇元禄二年王一男を生しける

よそ其等の望も甲斐あくぞありよりる然るよ
誰云とふく今出生の王子を真よ后妃の産る處
よりらぐ得知きぬ者の子ある由浮説ありれ
ぞ愚ろよも人民此説をぞ信じる
王女馬利を荷蘭の部長維廉よ嫁しるるが此君
を智力鋭敏よして且胆勇ありれぞ若し馬利
英王の位を嗣んよそ必ず政道を其夫よ任せべ
く見えしよぞ西教の人く此君よ其身の擁護を
歸しれぞ維廉之と一致して其乞ふよ從ひ潛
よ舟師兵隊を集め英國人民の苦難を救ひ王を

して非政を改正せしめむとて英國よ向ひ纜を
解き同年十一月トルヘーよぞ着岸したりる
惹米士第二を殆と衆人よ見放きれるるよぞ父
王の命運を思ひ出て潛よ皇宮を忍び出て
佛朗西よ遁き去りる
時よ英王の位未だ定る所なりぐ維廉来て政を
攝せれども特よ猶王たりぐ上下兩院之を勸め
て令を民よ下し衆を集て議せしめるる人く
謂らく惹米士王國の大典を破り自ら王位を退
き政府を捨たまぐぞ今大寶空位たり宜く有德の

人を撰び之を定むべしと衆論之に一致して馬利並に維廉に乞て王位に昇らしめ人民に自由自主の權を許し王と云へども政教自專の權なるべからざる旨約定して遂に維廉を英王と稱しなるゞ此事變を國政の大改革とぞ唱へなる此改革に依て英國政府の最後の定律を構造したりなり抑英國をサクソン、ノルマン及ひプランタジネット家諸王の頃人民自主の風たりしと云へども全く方今開化せる自由自主の樣に類似もべき者にあらざる加之約克、ランカスタル兩族

の爭ひ則ち玫瑰戰に至てぞ政府の規律頽廢し都鐸爾家の諸王を專ら獨權に出て斯去亞爾的の朝を人民自主と王家特權の爭に終り遂に西曆一千六百八十八年同前の此改革に到て國事の大政定まりなりぬ

維廉第三の事

評に云維廉第三を性勇猛にして劣ら政道に賢うなりなり加之西教派信仰の人くは一般に此君を以て彼等宗門の干城なりとして崇をなり

維廉立て英王となり兼て荷蘭各部を主宰ぬ時
は佛王荷蘭の地方を侵擾せしを王勉て之を掃
攘し英國の政教を改正し酷吏を去り廣舷の人
を用ひしゝぞ其威名歐洲を冠たり特は王元来
他郷の人なるを以て毎事荷蘭を偏庇するを多
うしゝぞ英人之を愛するを深くうしゝぞ
ぞ異論の者も少なゝ加ふるは故王をして
復辟せしめむとを謀る黨與あるゝ在朝
の宰輔中なも志を故王は通ずる者も在て悉く
國中の隱事を内通を斯ゝぞ新王維廉を立以
は之を倣へ

の位は在ゝや國人の離心を得んを豈難こゝぞ
や唯其政道民をして自主の權を得せしめ之を
毀つも敢て動こゝぞ之を阻むも更は奪ゝまゝぞ奸
謀ゝる者を事は先て豫め之を防き狡智ゝる者
を鈍く之を節取して用ひらゝるゝぞ能く王位
を保きしとゝり
亞墨利加大洲の發明は依て歐洲諸國の人民專
ら利を得しと以へぐも取分西班牙人を劇く土
人を殘害し墨西哥及び秘魯は於る金礦を奪領
せしゝぞ其利諸國は倍し國富を榮ゝ依て

近隣諸國其餘威自他を覆ひ掛らんとせぬ畏き
なる(ハバニヤ)
抑西班牙(ヒスパニヤ)國を其始め回々(ウイヒ)教宗あるサラセン即
ちモール人共の名人種の領地あるなるが後来耶蘇
宗を伐從せしめ然其モール人人種甚だ
多く且最も事業を出精あるなる
前代女王馬利(メリー)の夫たりし西王非立(ヒリップ)第二の子非
立第三の時を當り已の奉ずる宗門を違ひ他宗
と信ずる人民の境内を有ることを惡み悉くモール
人人を放逐したりしぞ遂に人煙乏却し且夫

りしをそ國民の材能技藝次第に劣り富國強
兵の術亡滅志たりなるを
西國(スパニヤ)衰微せし折を當り佛國(フランス)巍然として卓立し
威力諸州を抽たりしが其王路易(ローイス)第十四を位に
在ること七十二年此國開祖以来最も繁榮せる君か
なりし
新王も佛王の勢と強盛にして近隣を害せんとせ
計をなしぞ日耳曼(セルマン)席と同盟して三州の兵を併
せ專ら佛王の勢と防禦(フランス)したり
佛王路易(ローイス)曾て西班牙(スパニヤ)の所属たるフランデル地名

と取られぬ新王を專ら其地に於て佛王と戰へども毎に利を失ひ路易數勝を得しとゝへども更に一歩の地を得ること能はず却て新王を路易王の勢力を禁壓せし譽をぞ得たりける

故王惹米士佛國に逃れし以來路易王之を助け復辟を謀らるるが愛蘭の民羅馬正教を奉ずる者多きゆえぞ故王此地に渡り味方を語らひ之に從ふ者尠からず之に依て新王兵を率ひ親ら愛蘭に進發しポイヲ子に於て故王の兵と戰ひ充分に打敗るるにぞ故王又遁れて佛國に歸り叛郡盡く從服しぬ

斯て後新王を荷蘭に赴き他國の公使を集め之と謀りて再び英蘭撒西班牙等の諸國合體し日耳曼帝理伯を以て盟主とし實を新王に謀り主と戰守の柄を操りしが是より兵連り禍結て諸國の盟會益堅うし程に遂に懼れて和を請ふに至りぬ

西暦一千六百九十四年（我東山天皇元祿七年清聖祖康熙三十三年）王后馬利殂落を國人悲哀せるゆえ王后の人となり才能多く新王他國に在の間内患を鎮め

外寇を攘ふ皆后の智力によて法を國に行ふ整齊として視るべく醫院を創建し船卒軍士の傷を受け老病あるを皆妻子に在て養贍し其身を終らしめ給ふ

西暦一千七百一年我東山天皇元禄十四年清聖祖康熙四十年各國亦兵を合して佛國（フランス）を攻む是盟約に背き詐謀を設けを西班牙（ゼパニヤ）の地を併合せしを以ゆゑ此年九月故王惹米士（ゼームス）紐しゑれど佛王其子を以て惹米士第三と稱せしかば英國（イギリス）の民愈怒り賦を納め兵を出ぢんを欲しゑるに王則ち出

征し艱苦を嘗め轉戰しゑるが俄に疾に嬰り自ら死期の近きを覚り馬爾伯羅（マルボロウ）の舊罪を赦しを之を用ひ專ら之を信任せんべき旨後嗣安に遺命し明きぬ西暦一千七百二年春三月我東山天皇元禄十五年清聖祖康熙四十一年遂に紐を時に歳五十二位に在るを十四年あり抑王の行狀過失少からんと雖ども不賢にしを豈能く此事業を為を得んや然れども之を歐洲（ヨウロッパ）傑出の君と稱せるも敢て虛名ふらばるべし

是より前西暦一千六百九十八年我東山天皇元禄十一年清

聖祖康熙三十七年に當り魯西亞帝伯德琺英國に来り造船の術を習學ふ

女王安の事

評に云女王安を材質温柔にして善良なりき○女王の代に一個の良將なるマルレボロウを馬爾伯羅と呼び國外所々の戦に最も名高き勝利をぞ得たりける

女王安の故王の女なりし時に國民佛人との戦闘結び解ばりなれど女王も亦之に従事し先王の遺命に寄り馬爾伯羅を以て大將とし專ら之に委任せられぬ

爰に於て馬爾伯羅兵を將て先荷蘭に赴き佛將の境界に在る者と敗て境外に追逐し三城を得たりけれど師を荷蘭に駐めて英國に回り公位に昇きけるが時に亦佛兵日耳曼の地を侵と聞て再び師を出し日耳曼の難を救いんとて謀り特斷を以て左右に知らさで兵を發して荷蘭白耳義と防戦し奥地利と合して佛朗西巴威略と攻む佛將大拉德巴王と共に防戦て馬爾伯羅憤戦して大に兩國の軍を敗り大拉德を生擒

し後亦拉迷里斯に於て佛將味里勞の兵を敗り白耳義荷蘭の地を恢復し重て窩德那に之を大に佛將湿多米の軍を破り馬巴格に於て佛將米拉斯の兵を打勝ちたれども其威名佛地に震動し「馬爾来」々々と唱ひて泣兒も其聲を止めしとぞ斯くの如くなれど佛王路易の慢威も全く減却せらるるに

先王惹米士第一蘇格蘭より入て英王の位を併せ嗣し以来兩國一王に屬すと雖ども自ら嫌疑ふきを能らず爾来頻りに圖議を煩せども未だ成らざりしが女王の世に至り始て盟約を立て亦國名兩地を分たず一家に合し兩地の商賈行旅舟車の賦税等總て一律に歸し同く上下兩議院を立て全く兩地合體し之を名て大不列顛とぞ稱しける

馬爾伯羅は女王未だ位に昇らざるの前無二の交友なりける上即位の後屢國に大功ありしを以て寵遇他に越たりけるが亦其妻をも愛遇厚く政教の事一切其言語に從ひ給ふに馬尔伯羅の妻を才を恃て女王を愚弄たるを少からず故

に女王も之に堪えざる次第に其寵傾きくる時に馬善（マサム）と稱へる一女子ありて是亦深く女王の寵を蒙りたるにぞ確執によりて両女の間（ダ）不和ありけるが女王を馬善（マサム）を偏愛して遂に馬爾伯羅（マルレボロウ）夫妻を疏ずるに

爰に英國（イギリス）に二ツの黨ありこと女王以利撒畢（エリサベット）の代に起りし者にて一を英國に教長を置んことを願ひ一に其在ばくんを欲する者共ありしが査爾斯（ルレス）王第一の國亂に當りて此黨隨て二ツに相分れて戰ひくり査爾斯王第二の時猶（ホ）對立したるしが寂早宗門の事に多く心を用ひざ專ら政道の上に目を注ぎ一を王家の利を助る説に謂く國王の宜く欲する所を人民一切之に従順せざるべしと一を人民の益を獲る論を主張して謂く國王も亦是我政府官弁の一なり王に王の大權なきぞ人民も亦各箇自主の權なり豈猥に屈使せらるるべんや互に相争ひ爰に至て多利（トリー）輝格（ウヒク）の黨名をぞ得たりくる去て多利（トリー）の説若し真正なるときは近来の改革を叛逆の業にして維廣（ウイルヒム）王を僭奪の主たらるべし

馬爾伯羅（マルレボロウ）を其身並に交友重き輩格あるを女王を心多利（トリー）の説に左袒し女子馬善（マサム）も亦其黨あるを以て朝官執政漸に此黨多く馬爾伯羅（マルレボロウ）が大功の成んことを忌み之を廢しむを誣るに軍中貪横の状を以て罪せんことを媒りしかぞ軍中之を聞き詳然としてを為に其寃罪を訴んと出けるぞ馬爾伯羅（マルレボロウ）を遂に禍の身に及んことを懼れ妻諸共に他方へ遁れ去れぞ諸将之を見て解體し大臣等を又潛かに謀りて佛王（フランス）の乞を許し遂に和議をぞ取結びたる若し此時馬爾伯羅（マルレボロウ）をして師を出し列國の兵と合はぞ巴勒（パリス）を拔んを一鼓にたるんを權臣内に在て大將功を外に立るを難きを古来通患にして勲烈の成らざるを惜ひ哉

維廣（ウイルレム）王毎に後代に至り自ら建し改革の新法を破んことを憂ひ後嗣として堅く之を護り永續せんことを配慮せり往年れぞ両議院に諭置きたる旨にり然るに女王初め一女子在てゴロウセストル公たりしが齡十二歳にを俎し其後生子在ばりたるにぞ此時に至り上下両院相議して後嗣を哈諾威（ハノーフル）家の君と定めたり是血亂に於て最

も近く殊に西教信仰あるを
女王を自然位を令弟惹米士に傳へんを欲ス
ども多利の黨又二つに分れ一を雅各派と唱
て女王を助け惹米士を世嗣に立んとし一を哈
諾威と和し輝格の説と同く哈諾威家を後嗣と
せんとす然るに宰輔大臣も亦二説に分れ爭
ひしが女王を專ら雅各派を助るに由り其勢正
に熾ふるに人心競ふとして又羅馬教派の王
に使役せらるんを懼るが女王の病俄に
重り西暦一千七百十四年（我中御門天皇正徳四年清聖祖康熙五十
三年）齢五十歳位に在ること十三年にして殂落の時
に輝格の謀既に定り雅各派の者亦如何ともす
ること能はず遂に哈諾威の若耳治を以て英王と
為しかば爰に至て斯丟亞爾的の朝全く終り
ぬ

哈諾威家の諸王

瑞克の朝と云

惹耳治第一の事

評に云惹耳治第一は節素にして思慮
深くして○蘇民故王の子惹米士に
黨し王に叛て事を擧るが遂に破滅

に至りぬ

惹耳治（ビルヂ）第一は惹米士（ゼームス）第一の玄孫にして既に哈（ハ）諾威（ノーワル）の王たりしが英（ヒデ）王たるに當り更に國語を解せざるを能はざるに故に朝に臨みて言語甚だ簡約なりしを

王羅伯耳爾波（ロベルトウアルポル）を擧て首輔とせ這を近代の贊相なりて王及び後王を輔け位に在ること二十有六年赫々の功ありしと以へし勉て富國の策を立て每に戰を好む壯民の鋭氣を撓めて和平をぞ守ること

時に國中猶惹米士第二の裔を思ふ者多し故に其黨流言を放ち惹米士（ゼームス）第三將に入て王たらんとせ佛（フランス）王之を助く汝百姓宜く勤王をべしと言せしかど爰に於て反者遂に起り凡そ蘇地（スコットランド）北方の之に黨する者を相約して出獵し即ち義旗を立つ然るに惹米士至るに及て其性恇怯無能なるを見從ふ者望を失ひ官軍來迫るに及て其勢潰散したりしが後亦西班牙（スパニヤ）人之を助け將に英國を伐んとせ其船軍海上に於て狂飆の爲に壞敗し僅に二艘餘辛く蘇地に着せしかども是を

亦英(イギリス)兵を緊迫せゝるを盡く降服し多りゝ
王位を在ること十三年歳六十七を以て西暦一千
七百二十七年我中御門天皇享保十二年清世宗雍正六年を以て組落せり

若耳治(ジオルヂ)第二の事

評に云若耳治第二は其性敏捷にして
剛愎なりゝ○惹米士(ゼームス)第二の孫王なり
反し兵を蘇地に揚げ既に英(イギリス)境に入り
ゝるゲキュルレデンに於て岡北蘭公(キンバルランド)と
戦ひ大に打敗られゝり
王を先王の長子其位に昇る時年四十五前朝の

首輔耳爾波(ウアルポル)を任用し且王妃加羅林(カロリン)才畧ありて
能く王の性を制御し爲に大政を與り聽ゝれを國
内平和なること數年を経るなり
西暦一千七百三十七年我櫻町天皇元文二年清高宗乾隆二年
妃姐落しなるを朝政漸く穏ゝなれど國人愚ゝ
なれも太平に飽き戦を欲し執政の無事を好むを
惡まぬ時に西人(スペイン)英(イギリス)の商賈を虐しゝるより二國
將に兵を構へんとゝ王及び左右の大臣を初め
多く戦を欲するに耳尔波(ウアルポル)獨之を止るを能はず
遂に曲從しゝれど國人酒を酌て市に歡呼し相慶

まるを見て耳爾波唯潛かに歎息するのみなりけ
を
頓て西班牙を攻て小勝あり其後四五年間英軍
勝を得ざりしかど國人乃ち首輔を咎め遂に耳
爾波位を去ぬ惜むべし稟性常に利祿を人に分ち
身を處まる甚だ廉節あり然も物議を被るとい
へども元相度なるが故に聊か之を憂とせず任を
罷るの後又侯爵を賜ひ猶陰かに王に忠告し三年
を經て沒しぬ
西曆一千七百四十三年　我桜町天皇寛保三年　清高宗乾隆八年

親師を率て佛將を德丁顯に敗る是同盟に背き
墺地利女王の產を侵んとせしを以てなり爰に
到り佛人謂て英國の勢を壓んを其國を擾さん
如じと依て女王安の甥查爾斯義都華二の孫
を潛に蘇地に送りぬ
初め耳爾波未だ死せざる前王を諫て云若し戰
を好を怨を近鄰に結ぶ必ず先朝の餘裔を助
け國に兵を揚る者あらんと其言の如く此時先
朝亡滅の世を去を五十餘年其裔恢復を謀る者
三十年の久を經て今其國の兵外に在て賢相既

和漢書籍藏版

に在りと見て遂に旗を建て義兵と稱するに北方の之に從ふ者頗る多く加るに查爾斯狀貌雄偉志氣非凡なりけれど忽ち蘇の内地に突入し其父即ち惹米士者と稱し弟と奉じて王と唱へ官軍と敗て英境に入り倫敦に向ひ德爾丈に迫攻入たり然るに英人更に内應する者ふく佛人亦來り助げりけれど此重地に入り兵卒の心大に孤疑を生しぬ加之官軍兩路より來迫ると聞則ち查爾斯を諫め兵を纏め蘇地に退きしグキュルロデンに於て岡北蘭公の為に劇く打敗らるを同盟の

者悉く潰退せしかど查爾斯は姿を變へ形を竊て遁逃し五箇月を過ぎ辛く佛船の來救に逢て一命を助かりけるが後年伊大利に在て飲酒度ふく人に嫌惡せられ抑鬱して沒しける浩る後海上の戰兩國佛人に打勝て則ち和議を結びけれど之に嗣て七年餘りぞ無事なりける此頃英國の重なる同盟を普魯斯のフレデリッキと稱せし王にして其頃勇猛に佛奥日魯四箇國一致の侵襲を防戰せし英雄なりけり此戰を其國歷史に於て七年戰とぞ唱へける時に亦亞墨利

加(カ)なる植民地の事に就き戰を起さゝるを成ぬ
抑西班牙(スペニヤ)人南亞(アメリカ)の地を奪領し其國を富せし間英國(イギリス)よりも夥多勉勵ある民を新世界(亞地を稱す)の北地に轉植せしに此民漸次に蕃茂して今を海濱千五百里餘を充たるに至りしかば佛人(フランス)其幸榮あるを猜み加那大(カナダ)ロウイシアナに據り英民の首尾を斷ち且兩地の間處々に壘塞を築て相通接し全く英民(イギリス)土人と貿易の道を鎖んと為たりしかば英民(ピントン)之を見て怒を發し遂に兵を交ゆ此時宰相比的(ピット)を能名ある國をしを大治せしめ多

るが則ち烏爾布(ウオルフ)を舉げて將とし加那大(カナダ)を攻しめしに初戰利なしかば頓て黑夜險を冒し絶壁を越へ不意に起て佛將(フランス)を斃し貴北格(キベック)の城を落しなり然るに其身を彈丸に中てを死ぬ遂なりしなり

此翌年亦一城を拔き加那大(カナダ)全地悉く英國に歸しなるに歐洲(ヨウロッパ)にも亦大戰なり英將(イギリス)佛人(フランス)を敗り水師亦佛船を滅せしなり是より佛人亞墨利加(アメリカ)に在る地を失ひ且印度(インド)に在る者も大に勢を失ひなり

此全勝の時に當り王廷落を于時西暦千七百六十年（我年清桃園天皇寶暦十高宗乾隆二十五年）位に在ること三十四年齡七十七なりしを

若爾士（ジヨルジ）第三の事

評に云若爾士（ジヨルジ）第三の世に當り二（ジ）の緊要なる事こゝを起これり一を亞墨利加（アメリカ）合衆國の獨立一を佛蘭西（フランス）國の改革是なり且亦海上名譽の戰なり就中トラハルガルの戰に名將納尔森（ネルソン）飛彈の爲に討ぢり

王を先王の太子弗勒得力（フレデリック）の長子なり王妃察洛（クロツト）共に法紀を修め朝廷肅然たり時に海外所々の戰英人（イギリス）毎に利を得る由に隨て屬地の殖るを好まし兵の器たるを知らず加ふるに王性剛愎にして賢相の言を用ゐず後遂に亞墨利加（アメリカ）を失ふに至るを

亞地（アジア）植民漸次に繁盛するを以て王之に賦稅を命し諸事本國の民と均しくせんことを許さざりしかば亞民（アメリカ）之を歎き怨まざる聽まじ宰相以的之（ピント）を諫めども用ゐざるに亞民豪氣の輩相議て

兵を擧けるが大能の將華盛頓（ワレントン）既に華盛頓戰功記と題せる譯書なる物を委くこれを傳へ表々を得てしより勝負互に相當ると雖へども大洋を隔て主客の勢異なる上、英國（イギリス）の榮を猜む佛人（フランス）西人（スペイン）荷人（ホルランド）等亞人（アラビア）を相助しるぞ英人前後に敵を受け更に勝を取る能はざるぞ凡戰鬪八年の後西曆千七百八十三年（我光格天皇天明三年清高宗乾隆四十八年）遂に和を議し彼の望を許し佛（フランス）西と共に四國巴勒（パリス）に於て相盟ひて亞地爪哇（チイモール）に獨立しる其國を合衆國（ユナイテッドステイト）とぞ稱しる其明年亦荷人（ホルランド）と平きぬ

初め英人（イギリス）の東印度（インド）に通商する者唯商賈往來の房屋なるのみにして漸々に貨を以て地を上人に借り蠶食の基礎を建て隨て先王の末代に至て東印度（インド）を領する蒙古（モンゴル）人の勢衰へるを英佛（イギリス）共に其地を奪んことを謀り多く兵を遣せしに時しも孟加拉（ベンガラ）の部長来敷ひ英人百四十六口を捕へ獄に下しぬ然るに暑氣烈しく十に八九獄中に死せしるぞ英人の憤烈しく英將（ギリス）忽ち其部長と敗り其職を放ち柄を奪ひ遂に是東印度の地英に屬するの根基なるり

是より漸次に地を得しかど當代に至り遂に一大屬地となり其貿易利潤殆と亞墨利加に勝りなり

抑東印度古代の土人を匈奴にして無智無毒の民なり專ら米を以て重食とされど一日の費一「ペンス」半に過ぎず此土人ようして此地をランドスタアンと稱せ其天文等諸科の說皆古く其奉ずる神を一にして足らず其僧徒をブラミンと唱へり其後數百年を經て回教派ある蒙古人の爲に此地を唱へらるる是より二種の民雙派の

教門爰に兩立せ元來蒙古の性質匈奴と同しうらぐ故に一方を重に蒙古に從ひ其主をナポスと稱し一方を猶匈奴に服し其君をラヤと號しなり又英人此地に據に至て總て彼等を服從しなれを住民教宗三種とぞ成るなる

西曆千七百八十九年（光格天皇寛政元年）佛國大に亂る抑佛人古代を民に自主の權なりけるが數百年來全く王權に屈服せらるねきれを近隣の民自主の權なるを聞て其情堪るを能ハざ加るに亞國の獨立成就せしを見て愈憤に堪

だ此時遂に國に王たる者無らんとを望て大改革を成んとて血を淘て血を流し上下離絶し其勢水火の如くあり然るに普西等の王并に日帝等佛人の此改革を好まず兵を以て之を鎖静せんとし爰に戦争を引起し遂に英國の人く議論なれども首相意を決し釁を視政て佛事に與らざりき

時に佛王路易第十六世温柔平和の君なりき故に此有様を視て心安からず王妃ハ日帝の妹なり平素國民に惡まれぞ之を聞て其驚一方ならず王后密に議して皇宮を遯れ出國境に在る諸王と合せんとぞ志ありき然るに其事成らず是に於て佛人王后を捕へ皇居を毀ち諸部落共に王を廢し各首領を推して政務を執しめ歐洲列邦に宣言し其君を去んと欲する者を相助くべき由を布告しき翌年遂に王后を弑しき

西暦千七百九十三年（我光格天皇寛政五年清高宗乾隆五十八年）佛人檄を移し將に英國と戦んとす其意列邦の君なる者を吞むなり時に英國太平なること十年

ありしが故に和を議んと欲する者多く唯首相戰を主り國人多く之に從ひ[フランス]われども則ち諸國と相盟ひ以て之を拒む爰に於て歐洲一般戰野となりしが佛人其戰に多く勝利を得たり[フランス]英の水師を久しく列邦に抽たりしが唯亞地の戰に於て未年「ロルド」館「ロド子ー」憤戰して其熟技を顯せしゆゑを更に功績を建しを無りしに此佛國攻革の戰爭にも水軍均しく「ロド子ー」の勇畧を嗣きしれども所々の戰皆勝利を得たり然るに西曆千八百二年（我光格天皇享和二年清仁宗嘉慶七年）

両國和議成り亞面斯に於て相盟ひ[アメリカ]われども暫時戰爭は止まりぬ

佛國に一箇非常の偉丈夫を産しより其名を拿破倫勃那爾的（ボナパルテ）（我西洋英傑傳の三編に於て此傳を詳説ちべし）と稱しけるが此國亂に乘じて其才能を伸ることを得所々の戰爭に殊績を立しわづに兵卒の愛戴最深ろ[フランス]ぞ漸次に威權を得て此和議の時立て佛國の大首領となりぬるが其盟約も久しくして廢棄し拿破倫人（ナポレオン）として其身を推さしめ永久首領と成り盟に背き盡く歐洲列國（ヨロッパ）を滅し是が覇

主と為んとんと之に依て英も亦約を棄て馬爾達に據り地中海に通ずるを得たり

西暦千八百四年我光格天皇文化元年清仁宗嘉慶九年拿破倫自ら帝號を稱す此時佛民國亂に疲れし上兵力悉く拿破倫に奮ひ敵て抗する者もなく翌年伊太利を併せ王多く斯て多く兵船を備へ將に英と戰んとす英の船軍帥「ロルド」名納爾森之を禦ぐ此年十月トラハルガルに於て納爾森大小船三十一艘を率ひ佛人西人連合の兵船大小三十八艘に翔向ひ午時より申時に及び佛の水師將

を獲大に敵船を敗り仆り其戰方に終らんとする時納爾森飛礮に中られ弾丸胸を洞して遂に歿す抑納爾森は是より前埃及に於て拿破倫の軍を敗ぶし外所々の戰爭に屢卓效を顯せし名將なり仆る

爭亂以來佛人白耳義荷蘭瑞西蘭等の諸邦を切從しが此年に至り拿破倫自ら將とし日耳曼を攻めフーステルリッツに於て大勝を得たり仆る

ぞ日帝をして四百年來連續せる尊稱を廢し唯墨斯利亞帝を稱せしめ嗣て西暦千八百六年我

光格天皇文化三年清仁宗嘉慶十一年大ゝ普魯斯の兵を敗り首都伯靈を討入たり

凡譽を慕ひ名を求る人中庸を保ち適度ゝ止る者なるをもし去ぞ數萬の流血も人民の苦役も曾て戦勝攻取の君を感ぜしむるを難し拿破侖も亦然り故ゝ覇主の望ゝ止時ふし爰ゝ至て其兄の一を荷蘭王とふし一を維士德發里亞今普魯斯ゝ屬せ荷蘭の王とし猶亦傲慢の名ある西班牙の背ゝ當る人の王位を已が兄弟の内ゝ與へんを企て旗下の大将メユラットを以てナプレスの王としべ

ルナツドを以て瑞典の嫡儲ゝそふしらる爰ゝ至て葡萄牙人西班牙人相共ゝ兵を揚げ英國ゝ救援を乞しらぞ大将宅林登公其兵と合せ智能拔群ある軍畧を以て屢佛将を敗り大ゝ克威を折きらり

西暦千八百十二年我光格天皇文化九年清仁宗嘉慶十七年拿破侖兵力を恃ミ魯西亜を攻て遠く墨斯科府ゝ到ぬしゝ魯人早く其城を燒しらぞ佛人食ゝ盡き天亦寒烈兵士死する者算ふく狼狽して逃ゝ還りられぞ是より其弊ゝ乘じ列邦軍を起し佛國ゝ

攻入し程なく拿破侖勢窮り遂に位を避け降を乞
ふり諸國則ち相議して故王の裔路易第十八を
佛王の位に即け降王を以爾巴島地中海に流し歐
洲戰事止るが後三年を經て拿破侖此島を逃
出佛國に入りしに從ふ者甚だ多く揚々
て都城巴勒に來りぬれば路易王之を聞て先遁
し此に於て各邦亦大に驚き頓て英國魯普墨相
結約し大將宛林登普將と共に瓦得路に於て拿
破侖と決戰し遂に大に之を敗る拿破侖遁れて
巴勒に歸り尋て亦海濱に到り將に亞國に赴ん

として果さず自ら英國に投じぬれば再び之を
亞弗利加洋面の孤島聖厄里那に配謫し西曆千
八百二十一年我仁孝天皇文政四年清宣宗道光元年島中に於て
殂落せ
路易第十八位に復したまへども王家既に古代の
如き大權なく法度變化して衆民に自主の權を
許せり西曆千八百二十四年我仁孝天皇文政七年清宣宗道光四
年王弟查爾斯第十位を嗣しが七年の後此法を
破り古法に復せんとしぬれば衆民再び沸騰し
王家と戰ふこと三日民勝利を得たりぬれば王を

廢シヲルレアンスハ公を立てて王となし路易非立之
ゐり
若耳治王即位の初年を人民之を愛戴せざりし
ゲ漸次に能其躬を正し物を率ゐを見て之を敬
愛するに至りぬ後年王心疾を患ひ政を執るを
能ゐず西曆千八百十年より太子政を攝しゐり
王位に在ること六十年維廉比的及び其子並に査
爾斯惹米士佛克等相嗣て首輔と成り能く國家
の大法を治め全歐洲の爭亂にも更に誘引せず
きげりゐを然るに國家數十年征戰息時なく費

用支へざ國債次第に増加し未年其多なること八萬
八千零十八萬餘金此息三千二百四十五萬に至
る民力是より日々に絀き賦重く年飢へ數年の
後百姓愁苦物價昂貴し兵勇散ずるの後往く事
を生ぜ是等の弊遂に救ふを能ゐず黷武の悔豈
後鑒にゐざらんや
王齡八十二歳を保ち西曆千八百二十年我仁孝天皇
文政三年清仁に當て俎落せる王他の技藝なく唯
能臣下の才を量り器に從て之を用ひ人材を造
就せり是以て稱賛せざべし

若耳治第四の事

評に云若耳治第四の代に當りナハルラの戰爭に敵を土耳其味方ハ英佛魯三國合連の船隊あり之るが土人劇しく打敗られ且亦王の代國内に於る羅馬加特力即ち正教の者を許し爾後官途進仕の禁ある旨を布告せられけり

先王の末年王攝政たること十年あり之れを即位の初政道に為せる變移の記もべきなし此頃歐

洲ハ略平和なりしるが頓て希臘土耳其の間に爭亂起りしれど英佛魯の三國希人を扶け其獨立を定むるに船隊を地中海に備え土人等と其事務を論說し有りしるに西曆千八百二十七年我仁孝天皇文政十年清宣宗道光七年土耳其埃及の軍隊拿破里諾に在りしる者其約束を破らんとせるより遂に戰爭と成りしるが土人劇しく敗績をぞ志りしるに是より希臘を獨立の王國と成りしるが抑此戰に英軍最勇威を顯し希人を扶たりと云へども却て魯人の爲に働て其大望を助しに近こりしる望

如何なると云ふ魯人を毎ふ土人の勢を減し其首都剛士但丁を奪の心久きを知あるに共ふ力を勦せ土人を敗きを第り

「プロテスタンド」即ち英國ふ行きしを遂ふ「加」特力即ち正教漸ふ勢を失ひ朝廷の官吏両議院の社中も此教派の人を用ると禁じて國の定典と成来りしふ王位ふ昇る後久しうして此禁を許を

ゞき議論起立せしゞ西暦千八百二十九年仁孝天皇文政十二年清宣宗道光九年始て此禁を許し正教派の人亦進仕の路開きふ

王の政を監國の時を以て最も勝きを者とし即位の後却て之ふ及ふを能はゞ若耳治二世先王並ふ當主の間ふ當り蒸氣機関其外幾種の器械大ふ開け加之文學建築の術等も頗る進歩を見ると云

西暦千八百三十年我仁孝天皇天保元年清宣宗道光十一年王殂落を時ふ年六十八在位十一年あり

維廉第四の事

評ふ云維廉第四の世議院の改革を許せるを以て人の記臆ふ存を

維廉（ウヰルレム）第四を前王の弟あり時に年六十五即位以来専ら人民の幸福を祈り二千萬の金を拂て奴隷賣買の貿易を禁し且亦議院の改革を許さるるなれど是より國民愈安全にして賄賂依怙の害大に減少し刑法も亦頗る寛大なるに至りぬ

西暦千八百三十七年（我仁孝天皇天保八年清宣宗道光十七年）王危険の病に罹り遂に六月に至て殂落し位に在る

を七年あり

女王維多里亞（ヒクトリヤ）の事

女王維多里亞（ヒクトリヤ）を前王の姪に當りケント公の獨子にて此時齢十八歳則ち當今在位の王なり即位の年カナダ（亞墨利加の屬地）に於て一揆起りしかどもさせる困難もなく其事鎮り居るに二年打續て秋收不利なりしかるに下等の國民困窮なるを甚しと時亦不良の心を懐く者ありて此機會に乗じ煽動せんとわどに著しき黨與蜂起し自ら其仲間を「チャアリスト」と唱へ此を新免許と稱せる者を願ふを名とせるありしが所々に會合し夜を松明を燒連きて事を議したり一度を其衆二十餘萬人に及しかども凡そ二十人程の魁

首を捕誅せしまを略、此黨を治まりくを
西暦千八百四十年我仁孝天皇天保十一年清宣宗道光二十年まサ
クスコビル及ゴタの君アルベルトを迎へ之と
婚姻ありくを此を女王の従弟まして後年多く
の男女を産けらまたり
西暦千八百五十二年我孝明天皇嘉永五世界
清■宗咸豊二年
まを其名を轟せし宛林登(ウエルリングトン)死を此を史乗中最有名
なれを將たるの能を人の克く知る所まして智
勇誠まを兼備せり唯其事業多くを拿破侖(ナポレオン)の輝く
功績まを蔽いまくと雖へども其謀畧の目的を謬

まるまを示し加之相を成まを及で其智能く一日し
て事の顛末を察し行事謙遜まして其裁決屢法
吏を驚服せしめ更まを自已の私利を顧るまを
毎まを國家の大利を念とあせしかど稱譽頗る高
くまして人民深く歎惜し官亦喪費を
賜ひて之を葬るまを軍旅の禮を以てし行列善美
を盡せし程まを其通路を數百萬の男女立聚ひて
之を送りくを
當時魯西亞(ロシヤ)の帝を其名を尼歌拉士(ニコラス)と稱しくる
が邦域漸次まを廣闊し黒海まを臨を土耳其(トルコ)と境を

接せしかど愈剛士但丁を得んことを望むこと久しかれども更に機會を得ざるに此頃パレスチーン聖場の事より希臘派羅甸派の僧と爭擾を起しかれど魯帝を潛に時機の至まるを喜び之をそそのかせ土耳其領内なる希臘教派の者を悉く魯國より之を管轄せんことを望みて去れども此を元来土耳其の許ざる所なれば之を拒絶したりけり

魯帝は時勢を謀り日耳曼佛朗西及び英國も共に他事に係るべき形勢なきなどと思ひかれば策

を決し兵を擧て土耳其の地を切從んとあせしに土耳其人を之を懼れて和親條約の真誠なる盟を尋て英佛兩國に救援を乞はる

于時佛國は拿破侖第三の勃然として興まる折なりけれども萬事を措て魯國の威を禁壓せんと大不列顛英國の称と一致合體し墨斯利亞及び普魯西の局外中立を唱へて関せざる兩國英佛の兵を以下之に敵への船隊黑海に進入をセバストポル黑海に臨む魯國の府城の名の港内なる魯國船隊の進襲を押へ防ぐが翌春に到り遂に兩國と魯國の和親破れ戦

鬪はべりを定うるがゆゑにダニーフ河畔に於て土
人魯兵と戰て敵を追拂し後其地方恐在成し程
に夏月の終に両國の軍猶進てセバストポルを
攻んとす浩罕がゆゑに其地の総督魯帝の公子メ
ンシコフを敵の進路を截斷ん為めアルマ河の
左岸に居る阜丘の巔に六萬人の兵を備へ居り
抑此地を天然の絶所なる上多くの意匠を費し
て之を堅めるがゆゑに少くも三箇月間を敵を支止
んと謀るに両國の兵其地に達するに及び
夥多の兵を損せしかども僅か數時の間に之を

攻敗り乘取る程に魯軍を散くに敗績して遁
去りのメンシコフの斧鉞乘車を始め許多の炮
銃を捨置り此時若し両國の軍直に敵に逐ち
ば附入に成んにを容易くセバストポルの城
塞を乘取べうしに傷卒の手當死兵の埋葬等
に數日の間を費し其機會を失ひるを惜むべ
し
斯て両國の軍敵城セバストポルの南面に當れ
るバラクラワの湊に進て敵城の海路を取切り
城の南面なる阜丘を占て長圍をかくるが

（去以下倣之）

其地嵓石甚多うりしかども辛じて第十月十七日に至り全く用意整ひ始て炮撃を為すを得たりけれども然るに魯人も亦防禦の手段良巧なる上港中に閉ら居たる船隊より斷へず炮弾を飛し城兵を援けたりけれども中こに乗入るを得ざ其間又屢〻魯軍出撃して劇しく戦闘なりけれども味方毎日勝利を得の加之海軍も亦頗る功績を立たりけれども

于時魯帝尼歌拉士俄に殂落したりけれども此戦争和平に至るべしと人こ思ひたりけるに然るにあくまで太子亞勒山德黎帝位を嗣て専らセバストポルを守りけるにぞ愈〻戦争止時なく折柄厳冬に跨り殊に寒氣烈しき地なりけるにぞ其困苦言ふべからざるに然と能く堪凌て西暦千八百五十五年我孝明天皇安政二年清咸豐五年第九月八日總軍一齊に進撃し佛軍マニコフを呼る一砦を拔き英軍亦レダンと唱る塞を得たりける程に此手足の要害を失ひ魯軍遂に本城を守るを能ずして夜に紛に此地を捨て退去りけるを攻圍の始より十二箇月にして両軍セバストポルの墟址に乗入て

爰に本營と定め猶戰爭を止ばりしは墨斯利亞（ヲストリア）の勸解に依て両國兵を收免明治を西曆千八百五十六年（我孝明天皇安政三年清宗咸豐六年）第三月佛國巴勒（パリス）に於て魯人と和睦の約書を取替し茲に太平の春と成ぬ此戰に英國（イギリス）海陸の両軍頗る顯譽を得て爾来愈〻國富と榮元を

英國史畧卷之四終

明治辛未仲秋刊行

作樂戸癡鶯譯述
河津孫四郎閲

英國史略 二編

稟准 知新館藏梓

知新館藏梓